

## 海外事務所 だより

# 訪日観光促進に向けた中国の最新動向 観光を通じた日中地域間の更なる交流促進に向けて

北京事務所所長補佐 角森 一博 (京都府派遣)

北京事務所

### はじめに

日本では、「観光立国」の実現に向けて、訪日外国人旅行者数を二〇一〇年までに二〇〇万人にするという目標を達成するため、二〇〇三年度から官民一体となった戦略的訪日促進キャンペーンである「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を実施しております。その成果として、開始当初(二〇〇三年)は訪日外国人旅行者数が五二万人であったものが、二〇〇八年には八三五万人と過去最高を記録するに至りました。

今年に入り、世界的な金融危機や円高の影響を受けて、一月から三月までの訪日外国人旅行者数は前年同期比で大幅に減少(特に、韓国については前年同期比でほぼ半減)していますが、中国からの訪日旅行者数だけは唯一増加しており、この期間に限れ

ば、台湾を逆転して第二位となり、さらにこの二十年近く(一九八九年以降)第一位である韓国にも迫る勢いとなっております。(表1)

表1: 1月から3月までの訪日旅行客数比較 (単位: 人)

	2008年	2009年	伸び率
韓国	693,933	345,100	-50.3%
台湾	316,643	231,700	-26.8%
中国	260,022	274,500	5.6%
米国	186,359	151,000	-19.0%
香港	139,525	99,200	-28.9%
タイ	45,554	43,300	-4.9%
英国	54,448	43,700	-19.7%
豪州	72,320	62,100	-14.1%
カナダ	46,985	36,700	-21.9%
シンガポール	32,512	23,800	-26.8%
ドイツ	31,049	26,200	-15.6%
フランス	30,940	28,000	-9.5%
その他	229,005	193,100	-15.7%

出所: 国際観光振興機構 (JNTO) 訪日外客数調査 (2009年3月)

これまで中国からの観光客が訪れる観光地としては、東京と大阪を結ぶ地域、いわゆる「ゴールデンルート」が中心となっております。しかし、筆者が北京に派遣された後の業務を通じて、北海道や九州に対する関心も徐々に高まりつつあることを実感していたところ、今年に入り、北海道に対する関心が爆発的に高まることとなりました。そのきっかけとなったのが、年末年始にかけて公開された一本の映画でした。

### 映画「非誠勿擾」の大ヒット

二〇〇八年二月に中国各地で公開された「非誠勿擾 (フエイチェンウーラオ) (英語名: If you are the one)」という映画は、最終的な興行収入が三・五億元(約五二・五億円。二元〇一五円で計算)、観客動員数が一カ月足らずで三五〇万人、という記録的な



↑観光庁、北海道及び北海道観光振興機構から映画「非誠勿擾」を通じて北海道の観光振興に寄与したとして上海で感謝状を授与。右側が映画関係者（北海道観光振興機構より提供）

大ヒットとなりました。内容は、理想の結婚相手を求める中年男性がインターネットで知り合った若い女性と繰り広げるラブコメディーなのですが、物語の後半からラストまで北海道の道東地域がその舞台として登場しており、映画を見た観客は道東の雄大な自然や風景に感動し、ロケ地となった道東の各名勝地は中国人観光客で賑わうという状況になっております。

こうした動きを好機と判断した道東地域の観光業者で構成する「ひがし北海道観光事業開発協議会」は北海道、北海道運輸局、北海道観光振興機構と連携して、北海道副知事を団長とする総勢六〇名以上に及ぶ官民一体の訪問団を編成し、四月二〇日から五日間の日程で中国を訪問し、北京と上海において観光プロモーションを開催しました。

期間中、出境（アウトバウンド）旅行を取り扱う旅行者を対象とするセミナーや、釧路、阿寒湖、知床、旭川等道東地域の自然や食材、伝統工芸等を映像に収めたDVDを用いた魅力発信を行い、旅行商品の造成促進、ひいては中国人観光客の増加につながる取組みを実施しました。また、上海では観光庁、北海道及び北海道観光振興機構から、この映画の監督を務めた馮小剛（フオン・シャオガン）氏やその他関係者に対して感謝状と記念品が贈呈されました。

このように訪日旅行に対する中国側の関心は、その幅を広げつつありますが、こうした流れをさらに加速する可能性を有する、最新の動向を以下で紹介します。



↑当日のセミナー参加者向けに配布した資料（写真左）と会場で上映されたDVD「ひがし北海道の旅」（写真右）

## 旅行社条例の施行

この条例は従来の旅行社管理条例（二〇〇一年施行）に変わるものとして、今年五月一日に施行されました。中国政府においては、国内旅行及び入境（インバウンド）旅行は積極的に推進するが、出境旅行については経済発展の速度に合わせて徐々に推進していくという方向性を示しており、今回の条例もそれを反映した内容となっております。（表2）

その中で、特に重視しているのは「消費者保護」という観点であり、旅行者が納入する保証金が増額されるとともに、交通手段、宿泊先、食事場所、土産店に寄る回数・時間・その場所等を明記した旅行約款を参加者と締結する義務が初めて条例で定められることとなりました。

この背景となっているのは、一部悪徳業者による東南アジア方面の格安ツアーの存在であります。こうした業者は格安料金で販売した差額を補填するため、スケジュールには記載されていない、裏で提携している土産店に強引に連れて行き、購入するまで観光客を拘束し、その土産店から売上金を納めさせることで帳尻を合わせる、という実態が深刻な問題となっております。

今回の条例により、こうした悪質の格安ツアーを造成・販売することができなくなり、経費に見合った価格設定を行うことが

表2：旅行社条例の主なポイント（旧旅行社管理条例との比較を中心に）

①旅行者の区分の廃止	従来の「国内旅行者」及び「国際旅行者」という区分を廃止。旧条例の「国内旅行者」でも国内旅行と入境旅行までを取り扱い可能に変更（従来は国内旅行のみ取り扱い可能）。
②必要資本金額の低減	入境旅行を取り扱う場合の資本金を「最低150万円（約2,250万円）」から、国内旅行を取り扱う場合と同じ「最低30万円（約450万円）」に低減。また、事業を開始して2年経過し、法律違反や行政処罰を受けていなければ、出境旅行業務の申請可能に変更。
③事業拡大の容易化	新規に支店を出店する場合の資本金増額の廃止（保証金の増額のみに変更） ※国際観光振興機構（JNTO）によると、支店設置を容易にすることで、旅行者の淘汰を意図しているとのこと。
④外商投資旅行社による出境旅行業務の可能性の明記	出境旅行業務の実施は引き続き不認可とされたが（香港、マカオ、台湾への旅行含む）、国务院が事業実施承認を決定した又はその国が中国との間で自由貿易協定（FTA）を締結した場合には適用除外という条文が追加
⑤消費者保護の強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>●保証金額の引上げ（従来の国内旅行社10万円（約150万円）、国際旅行社60万円（約900万円）から、入境旅行まで取り扱う業者20万円（約300万円）、出境旅行を取り扱う業者120万円（約1800万円）に増額）</li> <li>●旅行者は交通手段、宿泊先、食事場所、スケジュールの具体的な内容と時間、自由活動の時間と回数、土産店に寄る回数・時間・具体的な場所等を明記した旅行約款を参加者と締結する義務を明記</li> <li>●参加者の同意を得ない限り、旅行約款以外のサービスを提供できないことも明記</li> </ul>

## 中国人向け個人観光査証の発給開始

義務付けられたため、従来であれば割高という理由で敬遠されていた日本向けのツアーとの価格差が縮まり、訪日旅行者数の増加につながるのではないかと予測されています。

中国国民の訪日団体観光旅行については、二〇〇〇年に両国政府間で実施要領が取り交わされ、同年九月に北京市、上海市及び広東省に居住する国民を対象に訪日団体観光査証（注1）が発給されることとなりました。その後、二〇〇四年九月からは対象地域に天津市、山東省、遼寧省、江蘇省、浙江省が追加され（ほぼ同じ時期に訪日修学旅行生に対する査証免除も実施）、二〇〇五年七月には対象地域が中国全土に拡大されました。

さらに、二〇〇七年二月に当時の福田総理大臣が訪中した際に実施した日中首脳会談を受けて、日中間の観光交流を促進するため、二〇〇八年三月からは少人数で構成される家族に対しても訪日家族観光査証（注2）が発給されることとなりました。

注1 訪日団体観光  
中国国民が観光目的により団体で（グループツアーを組んで）日本を訪問する制度。本制度による旅行団は五名から四〇名で構成され、一五日以内で日本国内に滞在する日程を編成。商

注2 訪日家族観光  
十分な経済力を有する中国国民が観光目的により、本人とその三親等以内の血族・姻族からなる一名又は三名で日本を訪問する制度。日本国内の滞在日数、必要となる添乗員数は訪日団体観光と同じだが、中国側旅行者に対する失踪者発生時のペナルティが強化され、一名につきマイナス三点が科される（仮に二名失踪した場合はマイナス六点となり、マイナス五点超という一カ月間の業務取扱停止処分が適用）。※いずれも外務省ホームページ掲載内容に基づき記載

用、親族訪問等観光以外の目的で訪日する人には不適用。添乗員は日本側及び中国側旅行者各一名（計二名）必要で、失踪者が発生した際にはペナルティとして一名につきマイナス一点が中国側旅行者に科される（日本側にも別途ペナルティあり）。

こうした観光査証発給要件の緩和により、査証発給数は順調に増加し（表3）、観光を通じて日中間の健全な人的交流の促進に貢献してきたところですが、中国側からより少人数で自由な観光を求める要望が寄せられてきていることから、本年七月一日より団体観光の形式によらない場合でも、一定の条件を満たす中国人観光客に対する査証発給が開始

表3：中国人に対する査証発給数の推移

	合計	団体観光 (内数)	割合
2004年	357,003	64,426	18.0%
2005年	404,058	73,682	18.2%
2006年	505,738	157,436	31.1%
2007年	660,487	261,972	39.7%
2008年	759,674	350,811	46.2%

出所：外務省ホームページ（2009年5月1日プレスリリース）



されます。  
 所管する外務省によると、一年間は、個人観光査証の試行期間と位置付けており、北京、上海、広州における在外公館においてのみ査証申請を受け付けるが、条件が整えば、中国における全公館（香港総領事館を除く）で受け付けるようにする予定とのことであり、今回の個人観光査証発給開始により、訪日観光客のさらなる増加が期待されます。

## 観光交流促進への期待と課題

今世紀の日本のリーディング産業となる大きな可能性を秘める観光産業については、その経済波及効果の大きさが指摘されています。観光庁によると、二〇〇七年度の旅行消費額は二二・五兆円であるが、その生産波及効果は五三・一兆円、さらに雇用創出効果は直接で二二万人、波及効果も含めると四四一万人と試算されており、国内外を問わず観光客の旅行消費額が増加するに伴い、さらに大きな波及効果が見込まれる中、特に、富裕層の増加が今後も見込まれる（注3）中国からの観光客の増加がもたらす経済効果は非常に大きいものと予想されます。

注3 マッキンゼー・アンド・カンパニーが実施した中国の都市化に関する調査によると、二〇〇八年の中国の富裕層（年収二五万円（約三七五万円）以上）は一六〇万世帯であるが、今後は年

一五・九％という速度で増加を続け、二〇一五年には四四〇万世帯となり、アメリカ、日本、イギリスに次ぐ第四位に富裕層が多い国になると予測（人民網日本語版二〇〇九年四月七日付記事より）。

そもそも「観光」とは、中国の古典『易経』にある「国の光を觀る。用て王に賓たるに利し」に由来する言葉です。執筆時点（五月末）では、新型インフルエンザ（H1N1型）の拡大により、日本向け団体旅行のキャンセルや延期が八〇％以上の報道（五月二五日付第一財經日報）も見られますが、これまで述べてきたような形で訪日環境が整備され、中国国民が日本の「光」を見つめ、その素晴らしさに直接触れる機会を増やすことにより、日本に対する正しい理解を深め、草の根レベルでの日中交流が一層促進されることを期待しております。

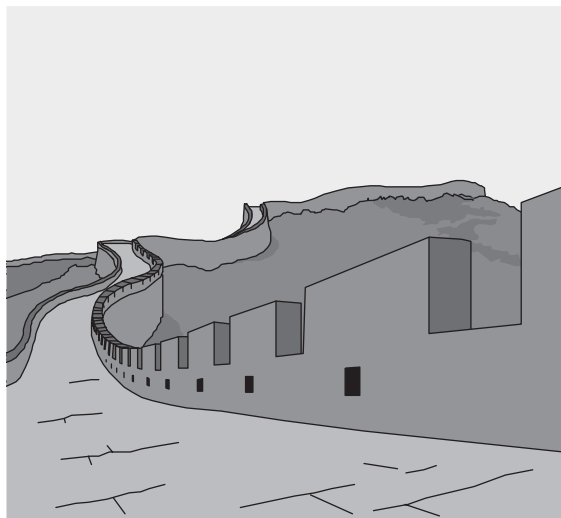
しかしながら、中国国内では、日本の各地域への訪問を喚起する情報（新聞・雑誌やテレビ番組等）を目にする機会が非常に少ないことから、特に地方都市について旅行目的地としての魅力があまり伝えられていないという問題が中国市場における訪日旅行促進の大きな課題となっております。

クリア北京事務所では、二〇〇七年度から実施してきた「自治体PR活動サポート事業」（二〇〇九年度から「自治体経済交流サポート事業」に名称変更）において中国各地で開催される旅行博覧会に「日本各地展」というブースを出展し、全国各自治体

のパンフレットを配布してきましたが、その際、東京、京都、大阪、北海道といった知名度の高いパンフレットを求めの人が多く、その他地方都市の知名度は依然として低いという現実を見えてきました。

現在、各都市の知名度をアップさせることにより、将来的な訪日観光客の増加につながるため、内部で様々な方面から新しい可能性を検討しているところであり、今後とも、自治体の皆様との連携をさらに強化することを通じて、こうした課題を是非とも克服したいと考えております。

末筆ながら、今回の執筆に際して、資料提供等で多大なご協力をいただいた、(独)国際観光振興機構（JNTO）北京観光宣伝事務所及び(社)北海道観光推進機構の皆様にご挨拶申し上げます。



## 海外生活 だより

北京事務所

# 北京の交通事情

北京事務所所長補佐 瀧口 達弘（北九州市派遣）

## はじめに

中国の政治・経済・文化の中心である北京は、約一六三三万人の人口を抱える大都市です。伝統と歴史が息づく街である北京には、毎年多くの観光客も訪れます。こうした大量の人々の交通手段を整備・確保するという都市交通の問題は、北京にとって重要な問題であり、長期的な課題となっています。

皆様もご存知のとおり、二〇〇八年に北京でオリンピックが開催されました。中国政府はオリンピック開催に向けて、インフラの整備を積極的に行うとともに、交通機関利用者のマナーアップにも力を入れてきました。オリンピック終了後の今もそれは続いて

います。

現在、北京での主な交通手段は、地下鉄、バス、タクシー、自家用車であり、自転車を利用する方は少なくなっているようです。北京の



↑北京中心部の交通状況

地下鉄網は年々整備されており、利便性が高く、タクシーについては、日本に比べて格段に値段が安いいため、私も通勤、日常生活において、地下鉄、タクシーをよく利用しています。

今回は、北京の地下鉄、タクシー事情についてご紹介いたします。

## 北京の地下鉄

北京の地下鉄は中国最初の地下鉄であり、一九六五年七月に建設が開始されました。

現在、北京の地下鉄は東西を貫く二号线、中心部を周回する環状二号线をはじめ、八通線、五号线、八号线、一〇号线、一二号线、そして中心部と北京首都国際空港を直結する機場線が整備されており、うまく乗換をすることで、スムーズな移動が可能となっています。

オリンピック開催に向けて、二〇〇七年一〇月に五号线、二〇〇八年七月に八号线、一〇号线、機場線を相次いで開業してきたのですが、現在でも複数の路線が建設中です。料金については距離にかかわらず、一律二元（二〇円。一元＝一五円で計算。以下同様）と低料金となっています。このように利便性に優れ、低料金のため、地下鉄の利用者は年々増加するなか、乗車マナーについては必ずしも良いとは言えません。

乗車時はラインに沿って並ぶようにラインは引かれているのですが、その意図は完全には浸透していないようです。先頭に並んでいても、必ずしも一番に乗車できるとは限りません。いつの間にか、目の前に人が割り込んできたりします。

また、降りる人が降りきつてしまう前に乗り込もうとする人も少なくなく、ドア付近ではせめぎあいが起こることもしばしばです。



↑地下鉄駅構内の様子

駅によっては、指導員が乗客を一列に並ばせ、降車客が降りてから乗り込むように指導しているところもあり、北京市としても、マナーアップに気を配っていることがうかがえます。

車内に乗り込んだ後は、今度は、「下車、下車（日本語で、降りますという意味）」と言いながら、ドア付近に人が集まってきたり、ドア付近にいないと降りることができなくなる可能性があるためです。できる限りドア付近には陣取らないことが、北京の地下鉄を快適に乗る方法と言えるかもしれません。

その一方で、高齢者や小さな子ども連れの方が乗車すると、若者も含めて積極的に席を譲っています。私も何度か見かけましたが、最近の日本ではなかなか見かけないことではないでしょうか。

## 北京のタクシ

北京では現在、約六・六万台のタクシが走っています。ちなみに、東京のタクシ台数は約六万台（国土交通省調べ・二〇〇八年三月末）です。

料金は、初乗り一〇元（二五〇円）で、三km超えると一kmにつき三元（三〇円）が追加

されていきます。夜間は深夜割増料金が加算されます。オリンピック開催に合わせて、ほぼ全てのタクシが新車に更新されていますので、車体自体は清潔で、シートに座った感じは日本のタクシと遜色ありません。逆に料金が安いいため、日本よりも快適に感じられるかもしれません。

北京では、道路に出れば流しのタクシが数多く走っていますので、比較的容易にタクシに乗ることが出来ます。地下鉄利用者が増えたために、空車のタクシが多くなったためという話もあります。

運転については、日本のタクシの方が安全運転のようです。タクシに限らず、北京の自動車の運転については、車線変更を繰り返して、クラクションを頻繁に鳴らしながら、一台でも前に先に行こうと走る方が多いようです。携帯電話が鳴れば運転中でも構わずに出ますし、通話しながらいつまでも走り続けるドライバーも少なくありません。事故が起らないか、こちらが心配になります。

タクシ運転手のマナーアップを図るため、北京市では、安全運転、接客サービスなどにおいて優秀なタクシ運転手を表彰・認定する制度を、二〇〇一年から施行してきました。二〇〇八年に新たに約二四〇〇名を加え、現在の認定ドライバーの数は五〇〇〇名を超えています。認定を受けたタクシには、屋根の上の走行灯に赤い星マークが付いていますので、このタクシに乗るこ

とができれば、日本のサービスに慣れている人でも、恐らく満足できると思います。写真のタクシに乗車していた運転手に聞いたところ、「認定されるには、サービス向上に心がけ、まずは会社に推薦してもらわなければならない」とのこと。会社内でもマナーアップの推進が図られていることがうかがわれます。



↑優良ドライバーの証、赤い星マークが付いたタクシ

タクシの乗客に目を移しますと、一人で助手席に乗車している方をよく見かけます。日本ではあまり見られない光景ですが、中国人に言わせると「運転手と話をしやすい。行先を説明しやすい。フロントからの景色の方がよい。」などの理由があるようです。確かに、北京の運転手は話好きな方が多いように感じられます。私も、日本から来たことを伝えると、嬉しそうにいろいろと聞かれた経験があります。

## おわりに

北京では、今年、過去最大規模の五〇〇億元（七五〇〇億円）を上回る巨額を投じて軌道交通整備を行っています。これまでも、急ピッチで都市整備に取り組んできた北京ですが、数年後には、また違った街の様子になっているかもしれません。